演題番号58

音韻検索に過剰な注意を向ける伝導失語症例に対する認知問題の有効性

○木川田 雅子[1] 湯浅 美琴[2] 稲川 良[3] 玉木 義規[4]

1) 東北医科薬科大学病院
2) 白ゆり総合リハケアクリニック
3) 水戸メディカルカレッジ 言語聴覚療法学科
4) 甲南病院

【はじめに】
呼称課題の改善を認めたが,対話では音韻性錯語,喚語困難による努力性発話に変化がみられなかった伝導失語症例に対し，絵カードを用いた認知問題で,過去の経験を含めた行為対象の多感覚統合に注目し介入した結果,言語行為の改善を認めたため報告する.

【説明と同意】
発表に際して症例に口頭で説明を行い，同意を得た.

【症例】
脳梗塞と診断された80代女性で，病巣は左中心後回と縁上回，傍側脳室（弓状束含む），右後頭葉であり，伝導失語症状を呈していた．対話の解読に大きな問題はなく，産生について「言葉がでない」と記述していた．発症後6ヵ月時点でのSLTA呼称課題正答率は17/20であったが，対話では発話を開始して少しすると喚語困難，音韻性錯語が著明に出現し，聞き手の推測を要した．その際，努力的に正しく発話しようする行為が目立った．また，絵カード中の行為の対象物の言語化が困難なことがあったが,絵の全体構造から文脈を推測することは可能であった.

【病態解釈】
本症例は「音の出にくさ」の自覚を持ち，発語行為でのみエラーに気付きが得られることで,音韻検索に過剰な注意を向け続ける傾向があり，言語行為の手段を切替えられずエラーが続出すると考えた．切替えが困難な要因として，目標語の産生に必要な空間性言語情報処理能力の低下や多感覚情報の統合不全を考えた.

【治療】
40分の訓練を月1回2ヵ月実施，自主訓練指導も行った．テーマを行為（食べる），レーマを対象物（目的語）に設定した4枚の絵カードで認知課題を提示した．その際，対象物に対する概念や過去の経験など多感覚的な想起を導いた．自主訓練では，一つの対象物に対し同様の手続きで多感覚的な想起を指導した.

【結果】
喚語困難は減少，発話行為でのエラーに対する修正行為の成功率が増えたことにより，努力的な発話も軽減した．症例より「話しやすい」との自覚も得られた.

【考察】
音韻規則は自律的なものではなく，それがどう活性化されるかは,常に他の選択（ある特定の認知過程を活性化させるというニーズ）に依存している（Carlo Perfetti, 1985）．本症例は認知課題によって対象物に纏わる概念や過去の経験を患者と共有したことで，音韻検索への過剰な注意を抑制し，空間性言語情報処理を含む適切な認知過程を経て目的語を産生するという行為が再学習されたのではないかと考えた.